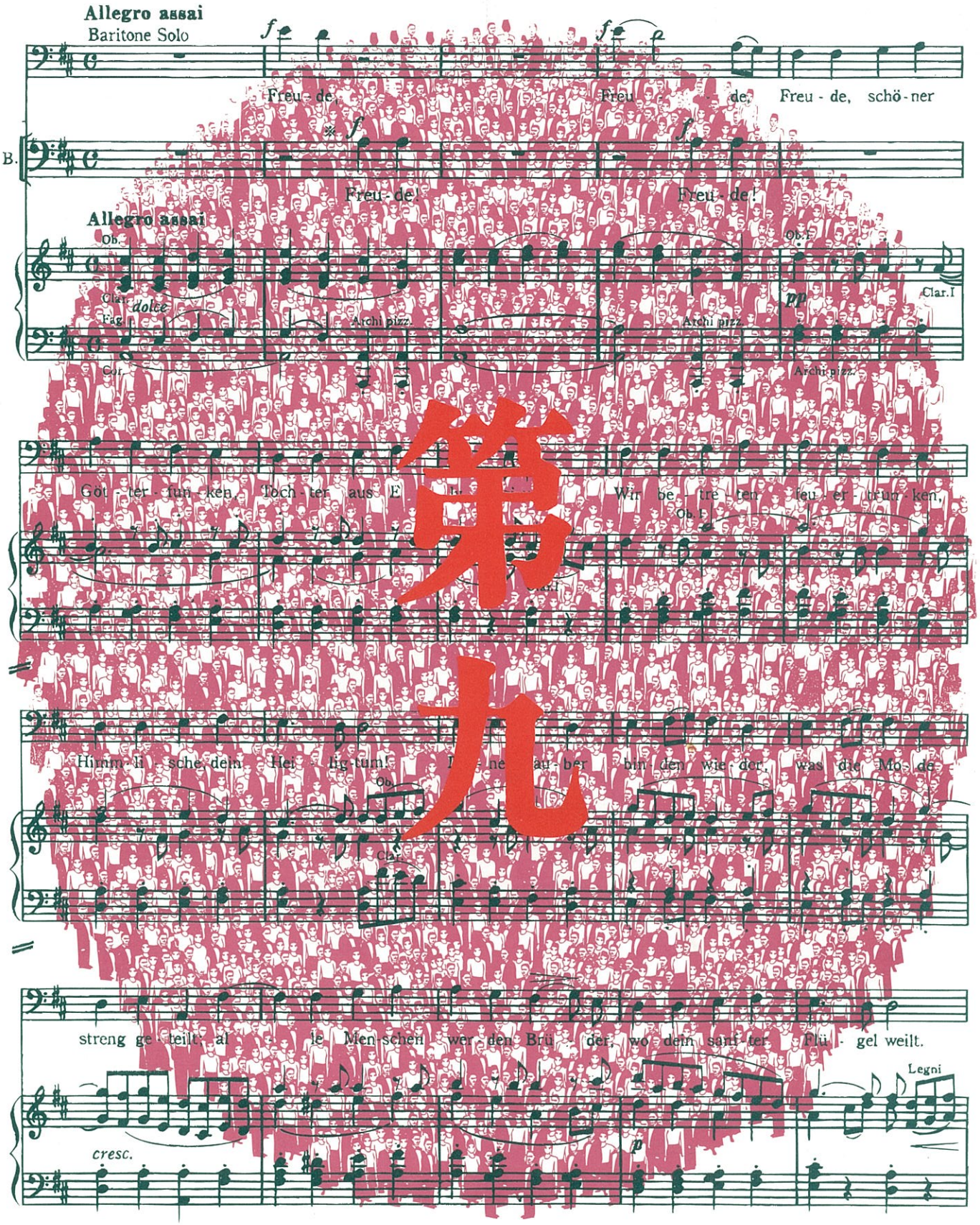


第九

2007春日井市民第九演奏会

とき 2007.12. 2 SUN 午後3時開演 春日井市民会館

主催　春日井市、春日井市教育委員会、(財)かすがい市民文化財団、2007春日井市民第九演奏会実行委員会

共催　春日井市交響楽団、春日井市民第九合唱団

後援　中部大学、中日新聞社

ごあいさつ

春日井市長　伊藤　太

2007春日井市民第九演奏会実行委員会長
中部大学 学監　三浦昌夫

本日は、「2007春日井市民第九演奏会」にご来場いただき、誠にありがとうございます。

この演奏会は、管弦楽から合唱までをすべて市民の手で作り上げたもので、平成5年12月に市制施行50周年記念事業のひとつとして開催して以来、今年で15回を数え、年末の恒例行事として市民の皆様に親しまれてまいりました。

これもひとえに、春日井市交響楽団と春日井市民第九合唱団の皆様の多大なご尽力の賜物と心から感謝申し上げます。

今回は、指揮者にドイツのマルデブルク歌劇場でのオペラ上演やドイツ・シンフォニー・オーケストラなどの指揮で好評を博しているアレクサンダー・シュタイニッツ氏を、そしてソリストにはモンゴル族青年合唱団に所属し世界各国で活躍する包金鐘(ボォジンゾン)氏を始め斯界の実力派の方々をお迎えし、迫力ある「第九」をお楽しみいただけるものと期待しております。

今年も残すところ一か月となりました。皆様方それぞれ思い出深い一年であったことと思います。この一年を振り返りながら、また新たなる年が良い年となることを願いまして、ごあいさつといたします。

本年も、恒例の「春日井市民第九演奏会」にみなさまおそろいでおいでいただきありがとうございます。

また、みなさまと感動の舞台をご一緒できる喜びを感じます。本年は、指揮者にドイツのマグデブルクから、ベテランのアレクサンダー・シュタイニッツさんをお招きしました。ソリストには、モンゴルでご活躍のテノールのボォジンゾンさんをはじめ、ソプラノの福住恭子さん、アルトの櫻井裕子さん、バスの松澤政也さんという若き歌手たちのご出演が可能になりました。いつもながら、200名を越える合唱団と市民によるオーケストラも参加します。

この一年の幸せに感謝し、新しい年を迎える、春日井市民のための、市民による、市民の「春日井市民第九演奏会」です。フィナーレの全員合唱のアンコール「春日井賛歌」では、まわりのみなさまと声を合わせて歌いましょう。来年もまた、よき年でありますように。

プログラム
Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG　VAN　BEETHOVEN（1770-1827）

交響曲第9番 二短調 作品125「合唱つき」
Symphony No.9 in d-minor op.125 “Choral”

第1楽章　アレグロ マ ノン トロッポ，ウン ポコ マエストーソ
1mov.　Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章　モルト ヴィヴァーチェ
2mov.　Molto vivace

第3楽章　アダージョ モルト エ カンタービレ
3mov.　Adagio molt e cantabile

第4楽章　フィナーレ，プレストーアレグロ アッサイーレシタティーヴォーアレグロ アッサイ
4mov.　Finale,Presto – Allegro assai – Rezitativo – Allegro assai

指揮者
Conductor
アレクサンダー・シュタイニッツ
Alexander Steinitz

ソプラノ　Soprano
福住　恭子
Fukuzumi Kyoko

メゾ・ソプラノ　Mezzo Soprano
櫻井　裕子
Sakurai Hiroko

テノール　Tenor
包金鐘(ボォジンゾン)
Bao jin zhong

バリトン　Baritone
松澤　政也
Matsuzawa Masaya

Music director
音楽監督　**都築正道**
Tsudzuki Masamichi

Sub conductor
合奏指導　**加藤完二**
Katoh Kanji

Chorus conductor
合唱指導　**吉川　朗**
Yoshikawa Akira

管弦楽　**春日井市交響楽団**
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

合　唱　**春日井市民第九合唱団**
KASUGAI CIVIL CHORUS OF THE 9TH SYMPHONY

出演者紹介

指揮者　アレクサンダー・シュタイニッツ

現在、マクデブルク歌劇場の指揮者で、インスブルックのチロル歌劇場の指揮者やエスナーブリュック交響楽団と歌劇場の第2音楽監督をしています。ザルツブルクで生まれ、4歳のときからザルツブルクのモーツァルト音楽院のカール・オルフ研究所で音楽を学びました。ウィーン音楽院でカール・エシュターライヒャーとレオポルト・ハーガーに指揮を学びました。その後、オーストリア政府から賞をえて、ウィーン音楽協会で指揮をして成功を納め、アメリカのエール大学へ留学してズビン・メーターに学ぶなど、研鑽を重ねました。その後、ウィーンの「若い音楽家のためのフォーラム」とハムの「国際フォーラム」で優勝しています。また、ベルリンのドイツ・シンフォニー・オーケストラやハレ州立交響楽団やマクデブルク・フィルなど多くのオーケストラの指揮をして賞賛を浴びて、テレビやラジオでも人気をえています。早くからオペラにも頭角を現わし、最近では、マクデブルク歌劇場で、《フィガロの結婚》や《コシ・ファン・トゥッテ》など、モーツァルトの数々のオペラ作品をはじめ、プッチーニやチャイコフスキーやヴェルディのオペラを上演しています。2007年の今年は、《リゴレット》や《タンホイザー》や《愛の妙薬》を連続して指揮します。今回の「春日井市民第九演奏会」は、彼の日本での指揮者デビューになるものです。

ソプラノ　福住　恭子

大阪音楽大学卒業、同大学院オペラ研究室修了。2001年より、ミラノ（イタリア）に留学し、ミラノをはじめ、シチリア島・マントヴァなどでコンサートに出演するなど積極的に活動している。豊かな声量と、あふれる音楽性、親しみやすいキャラクター。彼女の奏でる天性の声のドラマは人々の心に大きな感動と喜びを与えている。第21回イズマエレ・ヴォルトリーニ国際コンクール（イタリア）第2位。第1回国際声楽コンクール（マントヴァ・イタリア）第2位。オペラでは「トゥーランドット」リュウ役、「ラ・ボエーム」ミミ役、「イル・トロヴァトーレ」レオノーラ役、「道化師」ネッダ役などを好演。

メゾ・ソプラノ　櫻井　裕子

私立滝高校普通科卒業。大阪音楽大学大学院オペラ研究室修了。イタリア・ヴェルチェッリ市立劇場などでの「椿姫」にフローラ役で出演後渡伊。ミラノ市立音楽院にて研鑽を積む。オーストリア・フランス・ドイツ・イギリスなどで「蝶々夫人」に出演し、スズキ役を高く評価された。「セヴィリアの理髪師」ロジーナ、「フィガロの結婚」マルチェッリーナ、「コジ・ファン・トゥッテ」デスピーナ、愛・地球博開催記念シンフォニック・オペラ「白鳥（しろとり）」娼婦（初演）、「赤い陣羽織」おかかなどを好演。またベートーヴェン「第九」、ヴィヴァルディ「グローリア」、モーツアルト「戴冠ミサ」などのソリストも務める。第38回なにわ藝術祭において新人奨励賞を受賞。関西二期会会員。

テノール　包金鐘（ボォジンゾン）

中国モンゴル自治区出身。内モンゴル芸術学院声楽科卒業後、内モンゴル電力学校音楽教諭を経て、2001年来日、世界的にも有名なモンゴル族青年合唱団も所属しながら、中国代表としてヨーロッパなど世界各国を巡回するとともに、100余の国内外の音楽会に出場。内モンゴル自治区青年歌手コンクール第一位を4回受賞するなど、常に注目を浴び、数々の優秀な成績を修める。
01年日本にて第5回「長江杯」国際音楽コンクール声楽部門第2位受賞。05年第1回エルピス声楽コンクール第2位受賞。06年第8回「万里の長城杯」国際音楽コンクール声楽部門第1位と中国大阪領事賞受賞。日本国内において数多くの演奏会を行う。愛知県立芸術大学大学院声楽科修了。声楽を郷仁其ホ格、二神二朗の各氏に師事。

バリトン　松澤　政也

大阪音楽大学音楽学部声楽学科卒業、同大学音楽専攻科修了。関西の若手バリトン歌手として積極的に活動している。オペラでは「魔笛」パパゲーノ役、「フィガロの結婚」フィガロ役、「ファルスタッフ」フォード役、「カルメン」エスカミーリョ役、「蝶々夫人」シャープレス役などで関西歌劇団定期公演をはじめ、ザ・カレッジオペラハウス、川西市民オペラ、河内長野マイタウンオペラ、堺シティオペラなどで好演。2003年日中平和友好条約締結25周年記念オーケストラと共演、2006年にはイタリアにてプッチーニオペラフェスティバル「蝶々夫人」に出演している。また宗教曲でもモーツァルト「レクイエム」、「ミサ　ブレヴィス」、フォーレ「レクイエム」、ヘンデル「メサイア」、ベートーヴェン「第九」などのソリストとして活躍。第2回KOBE国際学生音楽コンクール、第16回、19回飯塚新人音楽コンクールなど入賞多数。山本正三氏に師事。関西歌劇団団員。

音楽監督　都築　正道

中部大学国際関係学部教授。文学博士。専門は音楽美学・音楽評論・オペラ研究。朝日新聞音楽評担当。春日井市交響楽団音楽監督。愛環音楽連盟会長。名古屋ナポリ協会会長。名古屋オペラサロン主宰者。豊田市文化振興計画策定委員会委員長。豊田市芸術文化推奨事業審査委員会委員長。カセラ国際ピアノ・コンクール審査員（ナポリ）。南イタリア・トラーニ国際ピアノ・コンクール審査員。

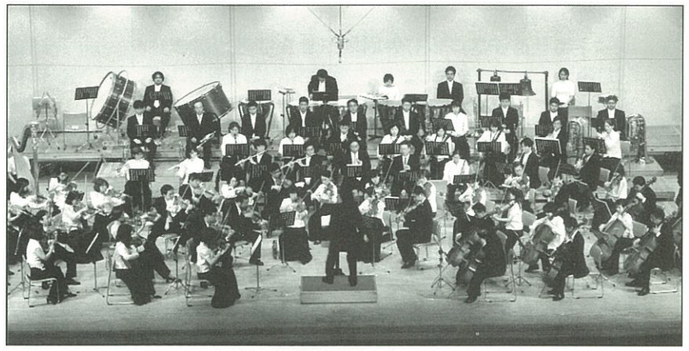
コンサートマスター　練習指揮　加藤　完二

ヴァイオリンを尾島綾子・東儀幸各氏に師事。在学中より指揮を学び、卒業後関西二期会等で朝比奈隆氏他の副指揮を務めた。大阪音楽大学でのオペラ指揮を皮切りに、各地でオーケストラやオペラを指揮。特にアマチュアオーケストラのトレーニングは好評。ルーマニアの「第２回ディヌ・ニクレスク国際指揮者コンクール」入賞及び審査員特別賞受賞。６年後同国でオペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」他を客演指揮し、海外でも評判を得る。伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団監督。クレフ室内管弦楽団主宰。

合唱指揮　吉川　朗

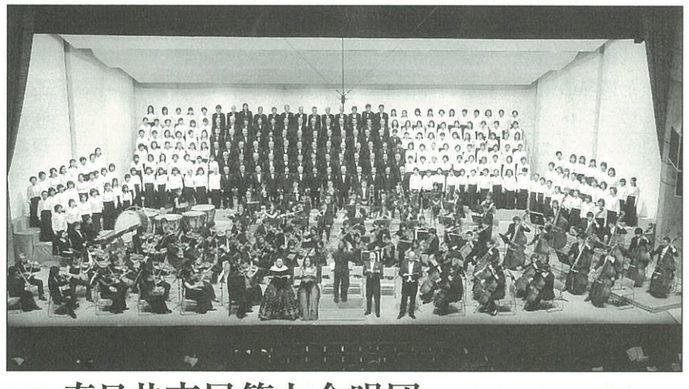
愛知教育大学音楽科卒業。同大学院（作曲）修了。第九指導は1987年の半田第九に始まり、ナゴヤシティ管弦楽団（現セントラル交響楽団）、一宮第九を歌う会、小牧第九合唱団など。
NHKナゴヤニューサウンズオーケストラ常任指揮者。

ピアノ伴奏（合唱団）
竹内　理恵
松永祐未子



オーケストラ　春日井市交響楽団

市民オケである春日井市交響楽団は、「第九の演奏会を春日井でも開きたい」という私たち市民の希望から生まれました。市内の音楽愛好家が中心になって、「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」が、1990年（平成2年）11月に創立されました。愛称『カポ』（KAPO）は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」（capo　頭・先頭に立つ者）の思いもあります。毎年、７月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちにとって、最大の喜びは、一人でも多くのみなさまに演奏会においでいただき、クラシツク音楽を好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。今年の「第九」も、大いに自信があります。ぜひ、お出かけ下さい。
（団長・花村浩克）



合唱　春日井市民第九合唱団

平成5年12月の春日井市制50周年は、市民の手によるベートーヴェンの「第九演奏会」の春日井初演によって盛大に祝われました。この演奏会を記念して作られたのが、「春日井市民第九合唱団」です。以後、毎年12月には、新しく募集した市民も加わって、220名を越すメンバーが常に新鮮なベートーヴェンの「第九交響曲」を歌い継いできています。創立以来、ベテランの吉川朗先生をはじめ、多くの優れた音楽家のご指導で、技術的にも、音楽的にも、完成度の高い「第九」演奏を心がけています。平成7年からは、年末の「第九」の本練習に入る前に、特別練習として数々の合唱作品に挑戦しています。本年7月7日（土）には、昨年に引き続きモーツァルトの作品に取り組みまして、ミサ曲等を文化フォーラム春日井の交流アトリウムにおいて、「アトの祭り」の演奏会に出演をいたしました。今年15回になる「第九」はアレクサンダー・シュタイニッツさんの指揮で、さらに美しいベルカントな演奏が出来るものと張り切っています。ご期待下さい。
（団長・山田伊素子）

「第九」のお話

2007春日井市民第九演奏会
音楽監督　都 築 正 道

1824年、この「第９交響曲」がウィーンのケルントナートール劇場で初演された時のことです。指揮台にお飾り的に立たされていたベートーヴェンは、もう全く耳が聞こえず、曲が終わったときの万雷の拍手にも気がつきません。見かねたアルト歌手のウンガー嬢が彼の袖を引いて聴衆の方に向けると、彼は初めてそれに答え、静かに頭を下げるのでした。初演は大成功でしたが、２週間後の再演は惨めな失敗に終りました。それ以後は、「難解であり技術的にも演奏不可能」を理由に、演奏会のプログラムに顔を出すことは滅多にありませんでした。そのベートーヴェンも世を去り、初演から20年以上たった1846年、この不遇な曲を改めて世に送り出したのは若き（33歳）ヴァーグナーでした。彼は自伝「我が生涯」で、その時の悪戦苦闘ぶりを痛快な思い出話として紹介しています。このヴァーグナーの話を読みますと、ベートーヴェンの第九交響曲が、当時の人々にどう評価されていたかを知ることが出来ます。大衆からは前衛的な音楽であるとして不人気を詫ち、楽団からは赤字の最高傑作として大変嫌われていたようです。また、ベートーヴェンの後に続くロマン派の作曲家たちが、この曲になにを見、なにを求めていたかも、良く分ります。

ヴァーグナーと『第九』

ドレスデン（ザクセン）宮廷指揮者の職にあったヴァーグナーは、この「第９交響曲」を年に一度の慈善演奏会で上演しようと企てました。そこで彼は、一般の音楽愛好家たちの無理解に対しては、匿名で『ドレスデン新聞』に熱狂的な上演歓迎の弁を載せ、また、専門の音楽家たちの頑迷さに対しては、『第９交響曲標題楽的解説』（1846年）を著して、文書による活発な啓蒙運動を展開したのでした。特にこの解説書は、「心情的理解の案内書」といっていいもので、「第９交響曲」の真価を熱っぽい口調で滔々と説いた情熱の書です（高木卓訳・『評論・小説集ベートーヴェン』・音楽の友社参照）。

またその一方では、指揮者として完璧な上演を目論み、練習も徹底したものにしました。「作曲者のオーケストラ構想が天才的であったように、オーケストラの演奏もまた天才的でなければならぬ」として、低音弦のユニゾンのレシタティーブだけでも12回の特訓をした、と述べています。その結果、旧弊（きゅうへい）なドレスデンの王室管弦楽団の幹事たちがこぞって反対するなか、ヴァーグナーのたった一人の反乱による演奏会は、大衆の圧倒的な支持のもとに大成功を収めたのでした。

「これを機会として、自信をもって取り掛かったことを大成功に導く技術と能力が私にはあるのだ、と思うようになった」とヴァーグナーは書いています。彼のそれ以後の悪魔的ともいえる独断に満ちた行動を考えると、ベートーヴェンの「第９交響曲」に関わるこの事件が、彼の生涯において如何に重要な役割を果したかがよく分ります。

それ以降、「第９交響曲」は、オーケストラの演奏技術がさらに向上するにつれて、次第に正しい評価を得ていきました。また、ロマン精神を抱く新しい世代の人々の登場によって「言葉を持った交響曲」が理解されやすくなったのも幸せなことでした。

最後の交響曲の最後の楽章の象徴的意味

ところで、「なぜ交響曲の終楽章に声楽を加えたのか」という疑問に対する答えですが、それはいろいろあることでしょう。ただ、答を直接出すことも大切ですが、ここで特に考慮にいれておいていいことは、この「第９番」が彼の最後の交響曲であり、その終楽章は、彼の一連の交響曲の最終楽章でもあるということです。

音楽史を少しのぞいただけでも、最後の交響曲の最後の楽章が（結果的にそうなったとしても）その作曲家の従来の交響曲の構成とは全く違った異質なものになっている例は意外に多いのです。ブラームスの「交響曲第４番」の終楽章（パッサカリア）、ブルックナーの「第９番」の終楽章（は完成されなかったので「テ・デウム」）、チャイコフスキーの「悲愴交響曲」の終楽章（アダージョ・ラメントーソ）、マーラーの「交響曲第９番」の終楽章（アダージョ＝フィナーレ）と並べてくれば、単なる偶然であるとしても、少々気になるところです。（無意識であっても）交響曲の絶筆となることを予感した作曲家が、その最後の作品の最後の楽章だけ、極めて前例のない破格なものに仕上げたことは、私たちに何か特別な（例えば、フロイト的な）感慨をもたらします。それは、ひょっとすると、後世の私たちに向けられた作曲者からの直接の「遺言」（マニフェスト）なのではなかろうか、と思えるのです。

特に、このベートーヴェンの「第９番」を聴くと、この終楽章こそ、正にベートーヴェンから後生の私たちへ届けられた「メッセージ」であるような深い思いにとらわれるのです。例えば、その一例として、終楽章の長い序奏のあと、テキストとして用いられたシラーの詩が歌いだされる前に、バリトン・ソロがまるで宣言文を読むように朗唱する箇所を指摘することができましょう。「おお友人たちよ、このような調べではなく、もっと心楽しく喜びにあふれた調べを…」と歌うこの冒頭での呼び掛けは、シラーの詩を始める前にベートーヴェン自身が書き記した序詞です。この個人的な発言は、終楽章がベトーヴェンの「マニフェスト」（宣言文）であることをはっきりと現わしているといえます。因みに、このドイツ語の'angenehmer'（もっと心楽しい）は、極めて宗教的な雰囲気を色濃くもった言葉であり、「福音の訪れ」といってもいい、喜びに満ちたものです。それは、「お休みなさい」"AngenehmeRuhe！"とか「よいご旅行を」'AngenehmeReise！'といった、願いと祈りに使われる言葉です。

シラーの『歓喜への頌歌』とベートーヴェン

ベートーヴェンが最後の交響曲の最後の楽章にテキストとして用いたのは、８節からなるシラーの詩『歓喜への頌歌』"OdeandieFreund"であるのですが、その中から人類愛を力強く賛えた詩句を自由に抜粋して再構成したものです。ベートーヴェンが、この詩に作曲しようと思いたったのは、彼がまだボンにいた1793年（23歳）のときだといわれています。「第９交響曲」の完成に先立つ31年も前のことになります。

その当時は、シラーの詩８節全部に歌を付け、通作歌曲として独立した合唱曲にしようと考えていたようです。しかし、「命名祝日」序曲（作品115）にこの合唱曲の流用を思いたち、その時は、ある程度抜粋した詩の構成になっていたそうですが、この企ても実現しませんでした。結局、ベートーヴェンがとても長い間こだわり続けてきたシラーの詩は、やっとのことで最後の交響曲に生を受けることとなります。でも、それは、すべての人から祝福された誕生ではありませんでした。

現代詩としての『歓喜の頌歌』

ところで、当時の人々にとってこの詩は、大衆におなじみの宗教詩でも聖句でも古典詩でもない、彼らと同時代の詩人フリードリッヒ・シラー（FriedrichvonSchiller,1759-1805）の思想的な現代詩でありました。時の政権メッテルニヒの政策に反対する「危険なほどの民主主義思想が、宗教的な歌詞の中に入り込んだのである」（フリーダ・ナイト）といわれるほど、本質的には、政治的な主張を歌ったプロパガンドな詩であると考えられていました。このことが、当時のウィーンの人々に、この曲を「難解」なものと感じさせた原因のひとつでもあります。しかし、それ以上に、彼らが強い戸惑いを覚えたのは、絶対音楽である交響曲に声楽を加えたベートーヴェンの前衛的な音楽技法であったことは、後世のドレスデンの例を見るまでもなく、当然です。ベートーヴェン自身も、この試みは単なる暴挙にすぎず、完全に間違いであって「いつか純粋音楽の終楽章を書こう」と弟子のツェルニーに語ったということです。

なぜ、交響曲に声楽をくわえたのか

とはいえ、ベートーヴェンが、このことをどれほど真剣に苦慮していたかは疑問で、結局、この改作案は実現されずに終りました。実際には、彼は、最後の交響曲が失敗作のままに終わることを恐れず、あくまでも交響曲に声楽を加えることの必要性を主張し、最後までその主張を放棄しなかったのだ、とも考えられます。この曲には何か、人間として、作曲家として、社会に対して果さねばならぬベートーヴェンの「義務の念」といったものが強く感じられるからです。

ここで私たちは、次の挿話を思い出します。ある人が、シェーンベルクに尋ねました、「どういう訳でベートーヴェンは、「第９交響曲」を乱雑だといわれながらも、書きつづけたのですか」。彼は言いました、「答は一つしか知らない。言わねばならぬことがあったからだ」。正に、その通りです。彼には、言わねばならぬことがあったのです。

作曲年代	1817年－1824年2月
初　　演	1824年5月7日ケルントナートール劇場
献　　呈	プロシャ王フリートリヒ・ヴィルヘルム3世
出　　版	1826年6月マインツ市ショット社。
	総譜・管弦楽合唱パート譜・終楽章ピアノ版総譜出版
楽器編加	フルート・オーボエ・クラリネット・ファゴット　（第４楽章でコントラ・ファゴットが加わる）．トランペット。第２、第４楽章にはトロンボン３が加わる）．以上各２．ホルン４.ティンパニ（第４楽章にはトライアングル、シンバル、大太鼓が加わる）．弦５部。ソプラノ、アルト、テナー、バリトン各ソロ．混声合唱
第１楽章	Allegro ma non troppo,unpocomaestoso.（14′）
第２楽章	Molto vivace.(11′)
第３楽章	Adagio molto e cantabile.(16′)
第４楽章	Finale.(28′)　　[1"09′]

'An die Freude' 対訳

内藤克彦　訳

An die Freude

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum.
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

Chor
Seid umschlungen, Millionen!
Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder— überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen.

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja — wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund!

Chor
Was den großen Ring bewohnet,
Huldige der Sympathie !
Zu den Sternen leitet sie,
Wo der Unbekannte thronet.

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Chor
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn uberm Sternenzelt,
Über Sternen muß er wohnen.

Freude heißt die starke Feder
In der ewigen Natur.
Freude, Freude treibt die Räder
In der großen Weltenuhr.
Blumen lockt sie aus den Keimen,
Sonnen aus dem Firmament,
Sphären rollt sie in den Räumen,
Die des Sehers Rohr nicht kennt.

喜びに

喜びよ、美しい神々の火花よ、
至福の園の娘よ、
われらは炎に酔いしれて、
天上のものよ、きみの聖所に歩み入る。
きみの魔力は
流俗の厳しく分離したものを、再び結び合わせ、
きみのやさしい翼の休むところ、
すべての人が兄弟となる。

合唱
抱き合え、百千万の人々よ!
このくちづけを全世界に!
兄弟たちよーあの星空の上には
一人の慈父が住み給うに違いないのだ。

一人の友の友となる
大きな幸に恵まれた者、
やさしい女性をかち得た者は、
声を合わせて歓呼せよ!
そうだーただ一つの魂をでも
この地上で自分のものと呼べる者は!
それをなし得なかった者は、
泣きながらこのまどいから消え去るがいい!

合唱
この大地球に住む者は、
共感を信奉せよ!
共感が、われらを星々へ、
あの未知なる存在の玉座へ導いてゆくのだ。

喜びを、万物は
自然の乳房から飲み、
善きものも悪しきものも、みな、喜びの
ばらの道を追い求めてゆく。
喜びは、くちづけとぶどう酒と、
死の試練を経た友をわれらに授けた。
快楽は、虫けらに与えられ、
神の前に立つのは、智天使だ。

合唱
ひざまずくか、きみたちは、百千万の人々よ。
創造主を予感するか、世界よ。
星空の上に、神を求めよ、
星々の上に、神は住み給うに違いないのだ。

喜びは、久遠の自然の
強いばねだ。
喜びが、巨大な宇宙時計の
歯車を回し、
花々をつぼみの中から、
星々を大空の中からいざない出し、
天球を、観測者の筒の見知らぬ空間で
回転させているのだ。

Chor
Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Aus der Wahrheit Feuerspiegel
Lächelt sie den Forscher an;
Zu der Tugend steilem Hügel
Leitet sie des Dulders Bahn.
Auf des Glaubens Sonnenberge
Sieht man ihre Fahnen wehn,
Durch den Riß gesprengter Särge
Sie im Chor der Engel stehn.

Chor
Duldet mutig , Millionen !
Duldet für die bess're Welt!
Droben überm Sternenzelt
Wird ein großer Gott belohnen.

Göttern kann man nicht vergelten,
Schön ist's, ihnen gleich zu sein.
Gram und Armut soll sich melden,
Mit den Frohen sich erfreun.
Groll und Rache sei vergessen,
Unserm Todfeind sei verziehn;
Keine Träne soll ihn pressen,
Keine Reue nage ihn.

Chor
Unser Schuldbuch sei vernichtet!
Ausgesöhnt die ganze Welt!
Brüder—überm Sternenzelt
Richtet Gott, wie wir gerichtet.

Freude sprudelt in Pokalen,
In der Traube goldnem Blut
Trinken Sanftmut Kannibalen,
Die Verzweiflung Heldenmut——
Brüder, fliegt von euren Sitzen,
Wenn der volle Römer kreist,
Laßt den Schaum zum Himmel spritzen:
Dieses Glas dem guten Geist!

Chor
Den der Sterne Wirbel loben,
Den des Seraphs Hymne preist,
Dieses Glas dem guten Geist
Überm Sternenzelt dort oben !

Festen Mut in schwerem Leiden,
Hülfe, wo die Unschuld weint,
Ewigkeit geschwornen Eiden,
Wahrhert gegen Freund und Feind,
Männerstolz vor Königsthronen—
Brüder, gält es Gut und Blut—
Dem Verdienste seine Kronen,
Untergang der Lügenbrut !

Chor
Schließt den heil'gen Zirkel dichter,
Schwört bei diesem goldnen Wein,
Dem Gelübde treu zu sein,
Schwört es bei dem Stermenrichter!

合唱
星々が天空の壮麗な平原を
飛翔してゆくごとく、朗らかに、
兄弟たちよ、きみたちの道を進め、
喜び勇んで勝利に向かう英雄のごとく。

真理の炎の鏡の中から
喜びは探究者にほほえみかける。
美徳のけわしい丘の上へ
喜びは忍耐者の道を導く。
信仰の光かがやく山頂には
喜びの旗がひるがえり、
打ち砕かれた棺の裂け目からは、
喜びが、天使たちの合唱の中に立つのが見える。

合唱
勇気をふるって耐え忍べ、百千万の人々よ!
よりよい世界のために耐え忍べ!
あの星空のかなたで
偉大な神が報い給うのだ。

神々に人は報いることはできぬが、
神々に等しくあることはすばらしい。
悲しい人も貧しい人も名乗り出て、
喜ぶ人と喜びを共にせよ。
恨みと復讐は水に流そう、
われらの不倶戴天の敵を許そう。
涙が彼の胸をふさぎ、
悔恨が彼の心をさいなむことのないように。

合唱
われらの黒表は破棄しよう!
全世界は和解せよ!
兄弟たちよーあの星空の上で、
われらが裁くごとくに、神は裁き給うのだ。

喜びは、ワイングラスの中に泡立ち、
ぶどうの黄金の血と共に
蛮人は柔和を、
絶望は英雄的勇気を飲む ——
兄弟たちよ、並々と注いだグラスがめぐり来らば、
きみたちの席から飛び立ちて、
泡を天に向かって飛び散らせ、
グラスをあの善い霊に向かって上げよ!

合唱
星々の渦巻きがたたえ、
熾天使の賛歌がほめたたえる、
あの星空のかなたの
善い霊に、グラスを上げよ!

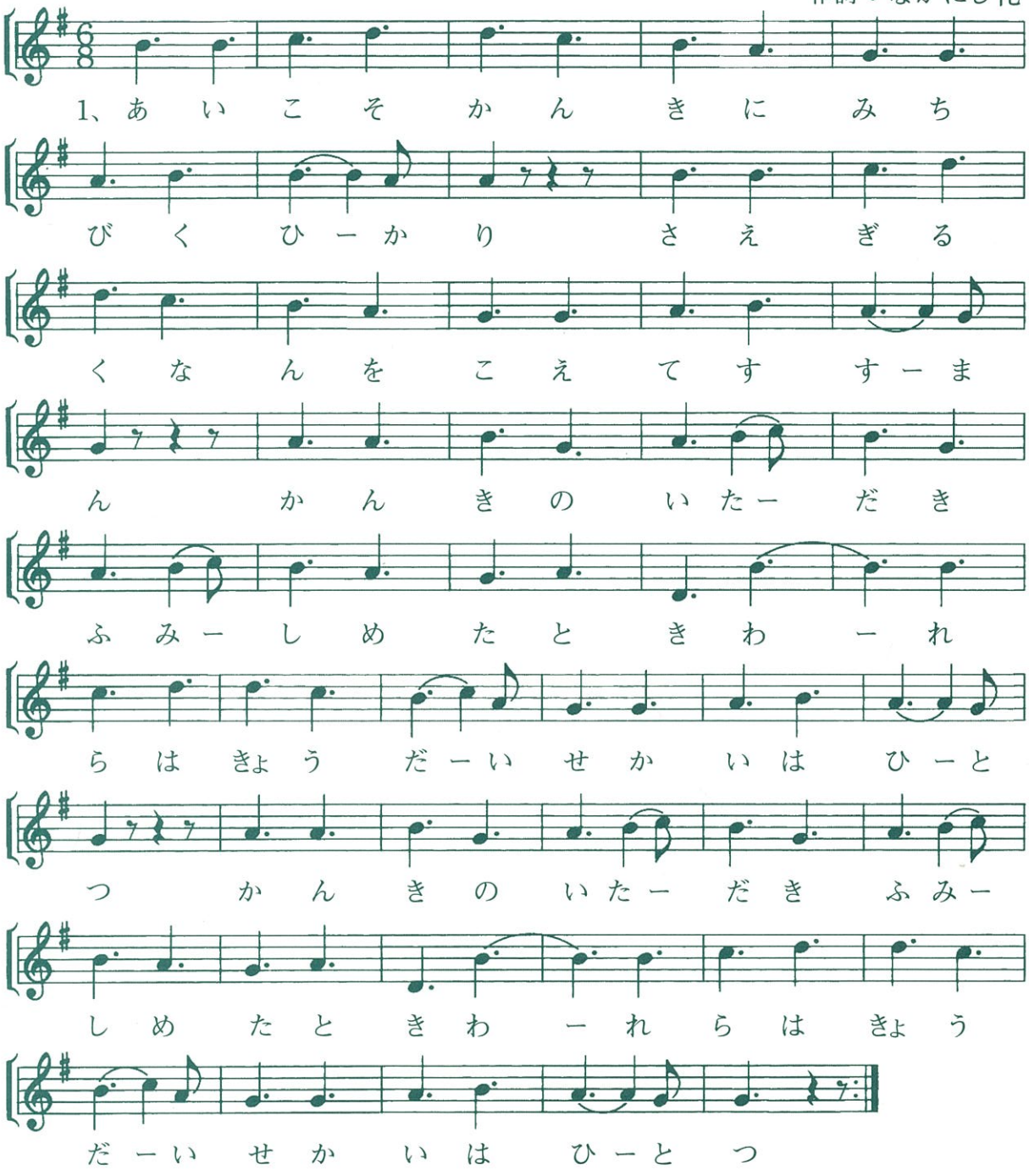
重い悩みには不抜の勇気を、
罪なくして泣くところには救いを、
固い誓いには永遠を、
友と敵には真実を、
玉座の前では男子の誇りを ——
兄弟たちよ、たとえ財産と生命に関わろうとも ——
いさおしには栄冠を、
いつわりのやからには没落を!

合唱
この神聖な輪をより固く結び、
この黄金のワインにかけて、
誓約に忠実なることを誓え、
あの星空の審判者にかけて誓え!

みんなで歌おう、春日井賛歌を…

＜歓喜の歌＞

作詞●なかにし礼



1．愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂(いただ)き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂(いただ)き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2．気高(けだか)き乙女をかち得たものよ
手をとり歓呼(かんこ)の叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ

日本音楽著作権協会（出）許諾第0712400-701号